200634103A

厚生労働科学研究費補助金

医療安全・医療技術評価総合研究事業

統合医療の安全性と有効性に関する研究

平成 18 年度　総括研究報告書

主任研究者　福井次矢

平成 19（2007）年　4 月

目　次

Ⅰ　総括研究報告書

主任研究者　福井次矢　（聖路加国際病院　院長）…… 1

Ⅱ　分担研究報告書

1. 山下　仁　統合医療・補完代替医療のｴﾋﾞﾃﾞﾝｽ検証のための臨床研究の現状把握…… 5

2. 蒲原聖可　ｻﾌﾟﾘﾒﾝﾄに関する制度･認知度・利用状況等に関する実態把握…… 9

3. 川嶋　朗　中国吉林省の統合医療施設調査等…… 27

4. 徳田安春　一般市民における補完代替療法（CAM）の利用頻度調査…… 33

5. 高橋　理　医師に対する代替医療の意識調査…… 41

資料１：患者の利用する健康関連商品・サービスに関する医師調査（調査用紙）

資料２：　〃　（調査結果）

Ⅲ　研究班員名簿…… 65

Ⅰ　総括研究報告書

平成18年度厚生労働科学研究費補助金（医療技術評価総合研究事業）
総括・分担研究報告書

「統合医療の安全性と有効性に関する研究」

主任研究者：福井次矢（聖路加国際病院　院長）

【研究要旨】
わが国における相補・代替医療（CAM）の普及・利用状況、認知度・関心度について調査した。また、CAMの有効性、安全性、費用効果性に係るエビデンスについて、網羅的な文献検索を行った。一般人口中のCAM、IMの普及・利用については、サプリメント・健康食品は20%～90%が利用し、薬理系CAMの利用度は医療機関受診頻度とほぼ同程度であった。とくに漢方は、医師の認知度・関心度。利用度とも高いが、その他のCAMについては認知度・関心度は低かった。CAMの検証は、主としてランダム化比較試験（RCT）を用いて行われる傾向が強いが、鍼治療のような理学系CAMについてはプラセボ対照群の設定方法や評価方法に一定の見解がない。サプリメントの有効性・安全性に関するエビデンスを収集・整理・構築し、一般消費者および医療従事者への提供が急務である。
【目的】
わが国におけるCAMの普及・利用状況について調査するとともに、有効性・安全性・費用効果性に係るエビデンスについて網羅的な文献検索を行い、エビデンスの有無、質を評価する。
【方法】
CAMの普及・利用状況については網羅的な文献検索と健康日記調査のデータ分析、有効性・安全性・費用効果性については網羅的な文献検索をおこなった。CAMの認知度・関心度・利用度について、パネル登録医師を対象にインターネット調査を行った。
【結果】
文献上は、一般人口の20%～90%がサプリメント・健康食品を利用中か利用の経験があった。1ヶ月間、健康日記を記載した18歳以上の成人2453名中、2103名（86%）が何らかの症状を経験していて、そのうち639名（30%）が医療機関を受診し、480名（22.8%）は薬理系CAMを利用し、156名（7.4%）が理学系CAMを利用していた。インターネット調査では、895名（男性797名、女性98名、平均年齢42歳）の医師が回答し、認知度、関心度、医師による患者への利用度は、それぞれ、漢方が87.6%、67.8%、74.2%と最も高かった。CAMの検証は、主としてランダム化比較試験（RCT）を用いて行われる傾向が強いが、鍼治療のような理学系CAMについてはプラセボ対照群の設定方法や評価方法に一定の見解がない。
【結論】
CAMの普及・利用の程度は高く、薬理系CAMと理学系CAMを合わせるとほぼ医療機関の受診頻度に匹敵していた。その一方で、CAMの有効性・安全性・費用効果性などの検証は不十分である。

A．目的

本邦は諸外国に類を見ないほどの高齢化社会を迎えており、疾病発症後の治療だけでなく予防医学が重要視されるようになった。このような現代先進国における疾病構造の変化と患者ニーズの多様性にともない、従来の現代医学的治療に加えて、相補・代替医療（CAM）に関心が高まり、欧米では国家予算を大規模に投入したCAMの臨床研究が行なわれるようになった。最近ではCAMと現代医学の優れた部分を合わせて「統合医療（IM）」という新たな医療概念が提唱され、患者ケアの質を上げるための模索が行われている。

しかしながら、統合医療の重要な構成要

素である CAM については、Evidence-Based Medicine（EBM）の概念に則った検証が十分でなく、現在その方面における研究を進めると同時に、統合医療を評価するのに適した新たな研究方法論を開発すべく、模索が続いている。とくにわが国では CAM の普及状況に関する基礎データさえ乏しい状況である。

そこで本研究では国内外の既存データの網羅的検索や必要に応じた現地調査を行い、CAM・統合医療の利用・普及状況を調査し、重要な CAM・統合医療に関する安全性と有効性を EBM の手順に則って検証することとする。さらには、CAM・統合医療を用いたときに有用であると判断される適応疾患について、医学的および社会的視点から国民の健康・疾病予防にどのような影響をもたらすのか評価・予測する。そうすることにより、わが国の現在の医療システムにおいて、CAM・統合医療にどのように対応すべきか提言を行う。

本年度は、わが国における CAM の普及・利用状況について調査するとともに、有効性・安全性・費用効果性に係るエビデンスについて網羅的な文献検索を行い、エビデンスの有無、質を評価する。

B．方法

一般消費者のサプリメント・健康食品の利用状況については、これまでに行われてきた実態調査を網羅的に整理した。

CAM の普及・利用状況については、われわれが過去に行った健康日記研究のデータ（Fukui T, et al The ecology of medical care in Japan. JMAJ 2005;48:163-167）を新たに解析した。

有効性・安全性・費用効果性については医学文献データベースを用いて、網羅的な文献検索をおこなった。

CAM の認知度・関心度・利用度について、パネル登録医師を対象にインターネット調査を行った。

統合医療の実践現場を観察するため、東洋の伝統医学の拠点である、中国吉林省の長春中薬大学、東北師範大学生命科学院などの施設を視察した。

C．結果

文献上は、消費者の 20%～90%がサプリメント・健康食品を利用中か利用の経験があった。

1ヶ月間、健康日記を記載した 18 歳以上の成人 2453 名中、2103 名（86%）が何らかの症状を経験していて、そのうち 639 名（30%）が医療機関を受診し、480 名（22.8%）は薬理系 CAM を利用し、156 名(7.4%)が理学系 CAM を利用していた。薬理系 CAM 利用者に多く認められた特性としては、年齢が 60 歳以上、女性であり、薬理系 CAM を利用しない者の特性は無職であった。理学系 CAM の利用者の特性は大都市居住者であった。

インターネット調査では、895 名（男性 797 名、女性 98 名、平均年齢 42 歳）の医師が回答した。医師の認知度は、漢方 87.6%、ヨガ 61.6%、アロマテラピー60.9%、関心度は、67.8%、アロマテラピー33.4%、ヨガ 31.2%、医師による患者への利用度は、漢方 74.2%、コエンザイム Q10 5.7%であった。患者が最も奥医師に相談する CAM は、漢方 95.2%、アガリスクや霊芝などのきのこ食品 66.9%、鍼灸 52.1%であった。

CAM の検証は、主としてランダム化比較試験（RCT）を用いて行われる傾向が強いが、鍼治療のような理学系 CAM についてはプラセボ対照群の設定方法や評価方法に一定の見解がなかった。

中国吉林省の伝統医学施設では、中医学と西洋医学の統合がかなり進んでいた。

D．考察

主として、既存のデータの分析とインターネット調査によるものではあるが、CAM の利用頻度は医療機関受診頻度に匹敵するほど高く、その背後にある CAM に対する認識度・関心度も非常に高いことが明らかとなった。

その一方で、有効性や安全性、費用効果性に関する質の高いエビデンスは少ない。

E．結論

CAM の普及・利用の程度は高く、薬理系 CAM と理学系 CAM を合わせるとほぼ医療機関の受診頻度に匹敵していた。一般人口中も医師も、CAM に関する認知度・関心度は高い。

一方、CAM の有効性・安全性・費用効果性などの検証は不十分である。

F　研究発表

1．論文発表

1) Yamashita H, Masuyama S, Otsuki K, Tsukayama H. Safety of acupuncture for osteoarthritis of the knee - a review of randomised controlled trials, focusing on specific reactions to acupuncture. Acupuncture in Medicine 2007; 24(Suppl): S49-52.

2) Tokuda Y, Takahashi O, Ohde S, Ogata H, Yanai H, Shimbo T, Fukuhara S, Hinohara S, Fukui T. Health Locus of Control and Use of Conventional and Alternative Care: a Cohort Study: British Journal of General Practice

3) 山下仁, 川喜田健司, 矢野忠. 変形性膝関節症に対する鍼治療のランダム化比較試験論文の概要　－京都国際シンポジウムの予備資料として－. 全日本鍼灸学会雑誌 2006; 56(4): 662-667.

4) 山下仁, 津嘉山洋. 国際化する鍼灸：その動向と展望(1)欧米における普及と臨床研究の進歩. 日本補完代替医療学会誌 2006; 3(3): 77-81.

5) 山下仁. 欧米における Acupuncture 事情と日本鍼灸の課題. 全日本鍼灸学会雑誌 2006; 56(5): 703-712.

6) 山下仁. 腰椎椎間板ヘルニアに対する鍼治療のエビデンス. 現代鍼灸学 2006; 6(1); 53-57.

7) 山下仁, 津嘉山洋. 統合医療の統計. In: 統合医療　基礎と臨床　Revised Edition 2007. 日本統合医療学会. 東京: 36-44, 2007.

8) 山下仁, 津嘉山洋. 国際化する鍼灸：その動向と展望(2)臨床研究方法論の問題と解決. 日本補完代替医療学会誌 2007; 4(1): 17-21.

9) 蒲原聖可：日本統合医療学会『日本統合医療学会誌』Vol. 3/ No. 1/2006　p38-43 サプリメントの現状と課題

10) 蒲原聖可：食品資材研究会『New Food Industry』2006 年 8 月号 vol. 48 No. 8 p53-59 統合医療におけるサプリメントの現状と問題点

11) 蒲原聖可：メディカルビュー社『THE BONE』2006 年 7 月号 vol. . 20 No. 4　p 83-88 骨粗そう症の予防 II 栄養「3. サプリメントの意義と問題点」

12) 蒲原聖可、折茂肇：新興医学出版社『モダンフィジシャン』2006 年 4 月号 Vol. 26 No. 4　特集：抗加齢医療 序論「健康食品・サプリメントの機能評価

13) 蒲原聖可：薬事新報社『週刊 薬事新報』第 2416 号 2006 年 4 月 10 日臨時増刊：p32　サプリメントと薬剤師の役割

2．学会発表

1) Yamashita H, Masuyama S, Otuki K, Tsukayama H. Safety of acupuncture for osteoarthritis of the knee: a review of randomized controlled trials. International Symposium on Evidence Based Acupuncture. Kyoto, Japan: Dec. 20, 2006.

2) Tokuda Y, Takahashi O, Ohde S, Ogata H, Yanai H, Shimbo T, Fukuhara S, Hinohara S, Fukui T. Health Locus of Control and Use of Conventional and Alternative Care: a Cohort Study: Poster Presentation: Poster Session I: Monday, May 21, 2007: ISPOR 12th Annual International Meeting, May 19-23, 2007, Crystal Gateway Marriott, Arlington, Virginia, USA

3) S Kamohara,Somboon oparatanawong. Efficacy and safety of the Coleus forskohlii extract for the treatment of obesity. The 47th Annual Meeting of the American Society of Pharmacognosy 2006 年 8 月 5～8 月 9 日(Arlington, Virginia)

4) 山下仁. 欧米における Acupuncture 事情と日本鍼灸の課題. 第 55 回全日本鍼灸学会学術大会. 金沢市観光会館: 6 月 17 日, 2006.

5) 蒲原聖可：『メタボリック症候群に関連するサプリメント利用の現状と課題』第 7 回難治性肥満症症例研究会(2007 年 2 月 24 日)

6) 堀田紀久子、中村好宏、中田由夫、蒲原聖可他：『肥満関連遺伝子のＳＮＰとメタボリックシンドロームとの関連性の検討』　第 27 回日本肥満学会（2006 年 10 月 27 日-28 日）

7) 蒲原聖可:『サプリメントの現状と課題』日本病院薬剤師会関東ブロック第 36 回学術大会（2006 年 8 月 26 日-27 日）

Ⅱ　分担研究報告書

平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金（医療技術評価総合研究事業）
総括・分担研究報告書

「統合医療の安全性と有効性に関する研究」

分担研究者：山下　仁　（森ノ宮医療大学　保健医療学部鍼灸学科　学科長）

研究要旨

目的：統合医療（IM）・補完代替医療（CAM）のエビデンスを検証するための臨床研究の現状を把握する。

方法：物理系 CAM の代表として鍼治療に焦点を絞り、主として PubMed をデータベースとして臨床試験論文を検索、収集、整理した。また、CAM の国際シンポジウムおよびそのワークショップに参加し、研究の現状を調査した。

結果：鍼治療の領域においても、EBM の概念に則って RCT を実施することが主流であり、薬剤の場合と同様にプラセボと称して偽の鍼を行う群を設定しているものが多かった。しかし近年は、何を対照群とするのか、患者の満足度や治療者-患者間の相互作用をどう評価するのかといった議論がなされるようになった。

結論：CAM の領域においても RCT を主たる検証方法論として有効性、安全性および費用対効果を検討するという姿勢が主流であるが、鍼治療のような物理系 CAM については、プラセボ対照群の設定や評価法についての意見が分かれている。今後、IM の重要な構成要素である CAM のエビデンスを検証するには、薬理系 CAM、物理系 CAM、スピリチュアル系 CAM などに分類して、それぞれに適切な研究方法論を模索する必要があると思われる。

A．目的

統合医療（IM）・補完代替医療（CAM）のエビデンスを検証することを試みた臨床試験論文を収集・整理し、その現状と問題点を理解する。また、海外における CAM の臨床研究方法論に関する議論の現状を把握する。

B．方法

1．鍼の臨床試験の現状

物理系 CAM の代表として鍼治療に焦点を絞り、主として PubMed をデータベースとして臨床試験論文を検索、収集、整理した。また、鍼の臨床試験論文のシステマティック・レビューについても検索、収集、整理した。

文献の入手には、大阪大学生命科学図書館、慶應義塾大学信濃町メディアセンター、東京衛生学園専門学校図書室、筑波技術大学視覚部附属図書館、筑波技術大学保健科学部附属東西医学統合医療センター、筑波大学医学図書館、および手元の文献コピーファイルを利用した。

2．CAM 臨床研究の国際的な状況

2006 年 12 月に、英国エクセター大学における CAM シンポジウム（Annual Symposium on Complementary Health Care）およびそのワークショップに参加した。このシンポジウムは、ヨーロッパにおいて最も長く継続されている補完代替医療・統合医療の研究会であり、毎年国際的に最先端の CAM 研究に関する成果発表が行われている。前日のワークショップには、EBM の観点から IM・CAM を評価しようとしている世界の医学研究者が集まったため、多彩な最新情報を収集することができる。

このシンポジウムおよびワークショップにおいて、IM・CAM の臨床研究の現状に

関する情報収集を行った。特に物理系 CAM の代表である鍼治療の研究方法論における議論については詳しく情報収集した。

C．結果

1．鍼の臨床試験の現状

文献の検索、収集、整理の結果、多くの鍼の臨床試験は欧米で実施されていることが改めて確認された。例えば、PubMed に収載されている鍼治療のランダム化比較試験（RCT）について報告した英語論文は 500 編を超えていた。

臨床研究の方法論としては、鍼治療の領域においても、EBM の概念に則って RCT を実施することが主流であり、薬剤の場合と同様にプラセボと称して偽の鍼を行う群を設定しているものが多かった。

例えば、変形性膝関節症に対する鍼治療の RCT については、1992 年から 2005 年にかけて 11 件の論文が発表されていた。筆頭著者の所属施設の国は、アメリカ合衆国（2 件）、デンマーク、カナダ、トルコ、タイ、中国、イギリス、スペイン、ドイツ、日本（以上すべて 1 件ずつ）であった。インパクトファクターの高い、いわゆるトップジャーナルと呼ばれる雑誌として、British Medical Journal 誌、Annals of Internal Medicine 誌、Lancet 誌に掲載されたものがあった。実施されていた RCT は 2 群から 4 群までの同時比較試験であり、鍼治療群のサンプルサイズは最少 8 名、最多 190 名であった。結果は、1 件以外はすべて鍼治療群が対照群と比べて症状改善の度合が優れているという評価であった。しかし、偽鍼（あるいは最小刺激鍼）群との比較では鍼治療群が有意に改善しているものと差がないものとに分かれていた。また、試算により手術回避による医療費節減の可能性を示唆する論文もあった。

すでに RCT のシステマティック・レビューによって鍼が有効、有益、あるいは有望である可能性が示唆されたことのある疾患や症状には、次のようなものがあった：

筋骨格系
- 慢性腰痛
- 頚部痛
- 変形性膝関節症、膝蓋大腿関節の疼痛
- 上腕骨外側上顆炎（テニス肘）
- 手根管症候群
- 腱板炎
- 高齢者の持続性の筋骨格系疼痛
- 肩峰下（インピンジメント）痛

外科・口腔外科系
- 手術後の疼痛
- 手術後の嘔気・嘔吐（予防も）
- 顎関節症
- 急性の歯痛

産婦人科系
- 機能性月経困難症
- 陣痛、分娩時痛
- 不妊
- 骨盤位妊娠（灸）
- 採卵時の鎮痛剤減少

内科系・その他
- 特発性頭痛、反復性頭痛
- 化学療法による嘔気・嘔吐
- 終末期の慢性閉塞性肺疾患
- 小児の夜尿症
- 線維筋痛症の疼痛
- 胃・食道の内視鏡検査（疼痛・耐性など）
- 不眠
- 脳卒中後の能力障害

ただし、システマティック・レビューで検討された鍼の RCT は質的に問題を抱えるものが多いため、将来、質の良い RCT が増えてくることによって、これらのレビューの結論は覆される可能性がある。

2．CAM 臨床研究の国際的な状況

現状としては、RCT を主たる検証方法論として、各種 CAM の有効性、安全性および費用対効果を検討するという姿勢が世界的に共通してとられていた。しかし近年は、患者の満足度や治療者･患者間の相互作用についてもっと評価しても良いのではないかという議論が、特に鍼治療のような物理系 CAM 療法の検証法において盛んに行われるようになっていた。

そのための新しい方法論や評価尺度についても模索がなされていた。例えば、方法論については pragmatic RCT、whole system research、質的研究などであり、評価尺度については The measure yourself medical outcome profile （MYMOP）などが提唱されていた。

D．考察

生薬やサプリメントなどの薬物系 CAM の臨床研究については基本的に薬剤の臨床試験と同様の認識でよいと思われるため、今後も厳密な RCT を計画し実施することが、有効性・安全性・費用対効果のエビデンスを検証する中心的な方法論になると思われる。

一方、鍼治療などの物理系 CAM 療法については、プラセボ錠と同等の対照群を設定することが難しく、臨床研究方法論そのものを再検討する必要があると思われる。

鍼治療の RCT には「プラセボ群」あるいは「偽鍼群」と称する対照群を設定した試験が多く行われている。しかし、プラセボ鍼や偽鍼の多くは、浅く刺したり皮膚表面を軽く刺激したりすることによって被験者に通常の鍼治療を受けたと思い込ませるものである。確かに偽鍼対照群では被検者の症状改善にプラセボ効果が関与するが、薬剤の RCT におけるプラセボ錠とは異なり、偽鍼による皮膚表面刺激が疼痛抑制機構や自律神経機能に影響を及ぼすことは生理学的研究から明らかである。実際、日本においてはこのような浅く刺入する鍼や皮膚表面を軽く刺激する鍼を「鍼治療」として日常臨床で行っている。

このように、鍼治療の RCT の妥当性には幾つかの疑問が投げかけられており、特に何を対照群とするかについては国内外の学会や医学雑誌で盛んに議論されている。

E．結論

CAM のエビデンス追求の現状を、臨床試験論文と国際シンポジウムから調査した。その結果、CAM 全体から見れば RCT を主たる検証方法論として、有効性、安全性および費用対効果を検討するという姿勢がとられていた。しかし、鍼治療のような物理系 CAM については、プラセボ対照群や評価尺度の設定についての意見が分かれており、プラセボを超えた治療の特異的効果を証明する方法が確立されていなかった。また、患者の満足度を評価する尺度についても現在様々な方法が提唱され試行されているという状況である。

今後、IM の重要な構成要素である CAM のエビデンスを検証するには、薬理系 CAM、物理系 CAM、スピリチュアル系 CAM などに分類して、それぞれに適切な研究方法論を模索する必要があると思われる。

F　研究発表

1．論文発表

1) Yamashita H, Masuyama S, Otsuki K, Tsukayama H. Safety of acupuncture for osteoarthritis of the knee - a review of randomised controlled trials, focusing on specific reactions to acupuncture. Acupuncture in Medicine 2007; 24(Suppl): S49-52.

2) 山下仁, 川喜田健司, 矢野忠. 変形性膝関節症に対する鍼治療のランダム化比較試験論文の概要　－京都国際シンポジウムの予備資料として－. 全日本鍼灸学会雑誌 2006; 56(4): 662-667.

3) 山下仁, 津嘉山洋. 国際化する鍼灸：その動向と展望(1)欧米における普及と臨床研究の進歩. 日本補完代替医療学会誌 2006; 3(3): 77-81.

4) 山下仁. 欧米における Acupuncture 事情と日本鍼灸の課題. 全日本鍼灸学会雑誌 2006; 56(5): 703-712.

5) 山下仁. 腰椎椎間板ヘルニアに対する鍼治療のエビデンス. 現代鍼灸学 2006; 6(1); 53-57.

6) 山下仁, 津嘉山洋. 統合医療の統計. In: 統合医療　基礎と臨床　Revised Edition 2007. 日本統合医療学会. 東京: 36-44, 2007.

7) 山下仁, 津嘉山洋. 国際化する鍼灸：その動向と展望(2)臨床研究方法論の問題と解決. 日本補完代替医療学会誌 2007; 4(1): 17-21.

2．学会発表

1) Yamashita H, Masuyama S, Otuki K, Tsukayama H. Safety of acupuncture for osteoarthritis of the knee: a review of randomized controlled trials. International Symposium on Evidence Based Acupuncture. Kyoto, Japan: Dec. 20, 2006.

2) 山下仁. 欧米における Acupuncture 事情と日本鍼灸の課題. 第 55 回全日本鍼灸学会学術大会. 金沢市観光会館: 6 月 17 日, 2006.

平成18年度厚生労働科学研究費補助金（医療技術評価総合研究事業）
総括・分担研究報告書

「統合医療の安全性と有効性に関する研究」

分担研究者：　蒲原聖可（東京医科大学臨床プロテオームセンター　客員助教授）

研究要旨

目的：本邦でのサプリメントに関する制度・認知度・利用状況等に関する実態把握。

方法：本邦の一般消費者におけるサプリメント・健康食品の利用状況に関する主要な実態調査を網羅的に整理した。医療関係者を対象に，健康食品に対する関心や制度の把握状況、健康被害症例の経験といった事項の調査も解析した。また、医学文献等のデータベースを利用して、個別のサプリメントに関する有効性・安全性のエビデンスを網羅的に収集・整理した。さらに、メタボリック症候群に関連する生薬の有効性・安全性を検証するための予備的な解析を行った。

結果：消費者の約2割から9割がサプリメント・健康食品を利用していた、あるいは利用した経験を有していた。サプリメント・健康食品の利用率や認知度は、調査の対象となる消費者層により違いが認められた。医療従事者のうち、医師は約6割、薬剤師は約9割が「健康食品」への関心を持っているとされた。そして、「健康食品」に関する患者からの相談頻度について、「ほぼ毎日相談を受けている」と「週に1回相談を受けている」が、開業医師は約3割、開業薬剤師は約4割であった。しかし、医師は約8割、薬剤師は約6割が、健康食品に関する制度について、「よく知らない」、「名前は知っているが、内容については自信がない」という結果が示された。また、個別のサプリメントに関する有効性・安全性のエビデンスに関して、医学文献上、まだ十分ではないと考えられた。サプリメント・健康食品の有効性及び安全性を検証するための科学的評価手法の確立のため、プロテオミクスの手法を用いて血漿タンパク質の予備的な解析を開始した。

結論：サプリメントの有効性・安全性に関して、エビデンスを収集・構築・整理し、疾患別診療ガイドライン等を通じて、一般消費者および医療従事者へのエビデンスの提供が急務である。

A．目的

本邦でのサプリメントに関する制度・認知度・利用状況等に関する実態把握。

B．方法

本邦の一般消費者におけるサプリメント・健康食品の利用状況に関する主要な実態調査を医学中央雑誌等のデータベースを用いて収集し、網羅的に整理した。また、Pubmed等のデータベースを利用して、個別のサプリメントに関する有効性・安全性のエビデンスを網羅的に収集・整理した。さらに、メタボリック症候群に関連する生薬の有効性・安全性を検証するための予備的な解析を計画した。

C．結果

I　サプリメント・健康食品の状況調査

（1）一般消費者におけるサプリメントの

利用状況に関する各種調査

一般消費者におけるサプリメントの利用状況に関する主な調査として次の報告がある。

・「日本における相補代替医療の利用状況」(筑波技術大学・山下仁)
調査対象：全国調査
調査方法：電話調査
調査期間：2001 年
有効回答者数および回答者の属性：1,000 名

結果：過去 1 年間に 76.0%が CAM を利用。内訳は、43.1%が栄養ドリンク剤、43.1%がサプリメント、17.2%が漢方薬（OTC）を利用。
（*Complement Ther Med.* 2002;10:84-93.）

・「健康診断受診者における代替医療の認知度・利用状況および病院受診時の自己申告率」(東京医科大学病院・蒲原聖可)
調査対象：健康診断受診者
調査方法：東京医科大学病院総合健診センターにおける出口調査
調査期間：2002 年
有効回答者数：1,530 名
結果：過去 1 年間に 42.7%がサプリメントを利用

シンクタンクによるインターネット調査として次の報告がある。

・【健康と癒しに関するアンケート調査】(UFJ 総合研究所)
調査対象：ネット利用者 90,094 件(メール配信ベース)
＊4,000 万人の全ネットユーザーが参加(サイトにアクセス)可能なオープン形式
調査方法：インターネットアンケート
調査期間：2003 年 1 月 14 日～31 日
有効回答者数および回答者の属性：8,997 人(オープンアクセスとしたため、有効回答率は算出不可能)

＊ 調査回答者についてのバイアス
①健康・医療へ関心の高い層、②インターネットユーザー
本調査における「健康・癒し関連産業」の範囲：サプリメント等健康食品、漢方薬、ドリンク剤、健康関連器具・グッズ、気功、瞑想、断食、はり・きゅう、整体、あんま・マッサージ、リフレクソロジー、ハーブ、アロマテラピー、ヨガ・アーユルヴェーダ、カラーセラピー、ホメオパシー、園芸療法、音楽療法、温泉療法、

結果：調査対象のいずれかの療法や健康法を利用したことがある人は約 83.0%。
「サプリメント等健康食品」の利用率は 62.4%。「ドリンク剤」の利用率は 59.4%
＊『本調査はインターネットを調査手法としているが、調査手法の異なる他調査の結果と比較すると、利用率が若干高い傾向がある。(「日本における相補代替医療の利用状況（電話調査、筑波技術大学・山下仁）」、「健康診断受診者における代替医療の認知度・利用状況および病院受診時の自己申告率(出口調査、東京医科大学病院・蒲原聖可)」)』(UFJ 総研)。

・【「健康食品」の利用に関する調査結果】(三菱総合研究所)
調査対象：「goo リサーチ」登録モニター
調査方法：インターネットアンケート
調査期間：2005 年 8 月 2 日(火)～8 月 5 日(金)
有効回答者数および回答者の属性：530 名(男性 42.3%　女性 57.7%)、東京都在住。
本調査における「健康食品」の定義：「健康の保持増進に資する食品として販売・利用されるもののうち、消費者が自らの判断により利用するもの。ただし、医薬品は含まない。」
結果：「ほとんど毎日利用している」33.0%、「週に 2－3 回利用している」11.7%、「月に 2－3 回利用している」5.3%、「必用な時に利用している」20.8%、「購入・入手時に利用したが今は利用していない」12.8%、「利用したことがない」16.4%

その他、一般消費者におけるサプリメントの利用状況調査が多数報告されている。
主な原著論文として、次の報告がある。

秋田大学医学部附属病院における妊婦のサプリメント使用実態と薬剤母乳移行性に関する認知度調査

菊地尚子ら：日本病院薬剤師会雑誌 43 巻 1 号 Page99-101

平成 17 年 9 月～18 年 8 月の 1 年間に秋田大学医学部附属病院産科病棟に出産目的で入院した妊婦 141 名、平均年齢（±S.D.）31.3±4.7 歳を対象に、薬剤およびサプリメントに関する聴き取り調査を行った。妊娠を機にサプリメントの摂取を始めた女性は全体の 22.0%であり、葉酸の摂取が最も多く、21.3%の妊婦に摂取が見られた。薬剤の母乳移行性については、42.6%の妊婦が「知らない」と回答した。

葉酸サプリメントは神経管閉鎖障害を防止する　妊婦の認知率と栄養バランス

近藤厚生ら：日本医師会雑誌 135 巻 9 号 Page2029-2034

どれほどの妊婦が葉酸サプリメントと先天性奇形との情報を承知し、葉酸サプリメントを摂取し、栄養バランスに留意して食事を摂っているか調査した。産婦人科外来を受診中の妊婦 2564 例にアンケート調査票を配布し、1359 通が返送された。葉酸が神経管閉鎖障害を防止するとの情報を承知していたのは 31%であった。計画的に妊娠した妊婦が過半数の 68%を占め、この事実を反映して妊娠が判明したのは 6 週以内が 70%と高率であった。葉酸サプリメントを内服中の妊婦は 23%、直ちに内服すると回答したのが 16%であった。

当院周辺における代替医療利用状況に関する調査

外山学ら：大阪府内科医会会誌　15 巻 2 号 Page204-210

周辺における相補代替医療（CAM）の利用状況を調査した。90 例から回答が得られた。健康状態別では、「高血圧症高脂血症、糖尿病等の生活習慣病があり、定期的に通院」が 53 例であった。医療関係者 22 例、非医療関係者 68 例であった。CAM としてあげた 15 項目のどれかを、69 例は 1 年間で 1 回以上利用し、最も多かったのがサプリメントの 45 例で、次いで栄養ドリンクの 31 例であった。

妊娠と栄養・代謝　妊娠中の適切な栄養管理をめざして 妊娠女性・若年女性における葉酸栄養状況とその効果に関する研究

石川浩史ら：日本産科婦人科学会雑誌　58 巻 9 号 Page1519-1526

妊娠予備軍としての非妊娠若年女性 100 名と妊娠中期の女性 53 名を対象に、血清葉酸濃度・血清総ホモシステイン濃度を測定し、同時に食事調査を行って食事からの葉酸摂取を調査し、その相関について検討。葉酸含有サプリメントを一定期間内服し、その効果を検討。葉酸の平均摂取量は 316μg であり、血清葉酸値や総ホモシステイン濃度とは関係はなく、食事の影響は殆どないと考えられた。葉酸含有サプリメントにより血清葉酸値は有意に上昇。

患者の健康食品摂取状況および意識調査と健康食品データベース構築

久保田康生ら：日本病院薬剤師会雑誌　42 巻 7 号 Page927-929

入院患者 73 例を対象として，健康食品に関する認識や摂取状況を調査し，特に，化学療法施行患者への服薬指導における健康食品摂取に対する薬剤師としての対応を検証した．57.5%が健康食品を摂取し，特にがん患者の摂取率が高かった．摂取群，非摂取群ともに健康被害や相互作用の可能性を疑う頻度に差は見られなかった．

向精神薬服用患者におけるカフェイン含有食品，アルコール飲料，サプリメント摂取の実態調査

落合理路ら：日本病院薬剤師会雑誌　42 巻 6 号 Page805-807

ある精神科病院において通院治療を受けている 136 例を対象に，家庭で摂取しているカフェイン含有食品，アルコール飲料，サプリメントの摂取状況を調査検討した．これらの食品を摂取する患者が約 50%存在し，患者の多く（20～30%）が相互作用上問題があると思われるカフェイン含有食品，アルコール飲料を摂取した．

広島県民の健康食品に関する意識調査
金森久幸ら：広島医学　59 巻 7 号 Page602-611
アンケート票を配布し，計 1732 名から回答を得た．健康食品に対して興味・関心が「ある」と回答したのは 75%，健康食品の使用経験が「ある」のは 74%であった．使用経験者の割合は年齢が上がるほど増加し，また男性よりも女性の使用経験率が若干高かった．使用頻度は「毎日」が 44%，「時々」が 36%であった．使用する理由は，全体では「健康の維持・増進」63%，「栄養補給」28%，「疲労回復」26%の順に多かったが，年齢により大きく異なり，若年層（学生）では「栄養補給」が最も多く，年齢が上がるほど「健康の維持・増進」が増加した．健康食品の購入に際して参考にする情報は「商品説明書」が最も多く 34%，次いで「知人の勧め」31%，「雑誌・書籍」24%の順であり，「インターネット」は 7%と少なかった

産婦人科受診者の一部に対する機能性食品等の使用状況に関するアンケートの実施について
則松良明ら：倉敷中央病院年報　68 巻 Page147-149
産婦人科において子宮内膜細胞診を受けた 100 名を対象に，機能性食品等（漢方薬，健康増進目的に摂取している食品を含む）の使用状況を調査し，細胞診結果との関連について検討．内膜増殖症および類内膜腺癌群（A 群）28 名，化生性変化を伴う非増殖性内膜群（B 群）48 名，正常増殖期内膜群（C 群）24 名に分けて使用状況を比較すると，A 群は他の 2 群に比べてエストロゲン類似の働きをする機能性食品の使用率が高かった（A 群 46.4%，B 群 25%，C 群 25%）

葉酸は神経管閉鎖障害の発生リスクを低減する　経産婦と妊婦の意識調査
椎名綾子ら：産婦人科の実際　55 巻 5 号 Page849-854
葉酸が神経管閉鎖障害の発生リスクを低減するかについて，経産婦と妊婦の意識調査を行った．対象は，2002 年調査は 2001 年に分娩した経産婦 1692 名，2003 年調査は妊娠外来受診中の妊婦 2020 名、回答率は 2002 年調査 770 名（46%），2003 年調査 823 名（41%）であった．1）葉酸の持つ重要な生理作用の認知度は 2002 年 15%，2003 年 24%と有意に上昇しており，情報入手源はマスメディアが両年とも 70%以上を占め，次いでインターネット，医療職であった．2）総合ビタミン剤やサプリメントから葉酸を摂取していたのは 2002 年 9%，2003 年 16%と有意に上昇。

現代西洋医学以外の伝統的医療・治療の使用と健康問題に関する実態調査
福田早苗ら：日本公衆衛生雑誌　53 巻 4 号 Page293-300
熊本県小国町町民 35 歳以上 64 歳以下の 3,501 人全員を対象とした自記式質問票を実施（回収率 83.6%）．現代西洋医学以外の伝統的な医療や治療方法使用・摂取は，約 57%であり，全体的に年齢が高いほど，女性であるほど，高かった．最も多いのは，栄養補助食品/健康食品で女性 47%，男性 35.3%であった．

沖縄県地域住民の代替療法に対する意識とその利用状況の実態調査
宮尾鈴ら：琉球医学会誌　24 巻 2 号 Page59-69
2003 年 3 月～6 月にかけて，沖縄県内の企業就労者，生きがい型デイサービス参加者，人間ドック受診者など計 1121 名を対象にアンケート調査し，748 名から有効回答を得た．約 4 割の人が代替療法を利用していた．利用頻度の高い代替療法は「栄養補助食品」や「ウコン」などであり，年齢層別にみると若年層で「栄養補助食品」「運動」「水」などの頻度が高く，加齢とともに「薬草」や「健康茶」の頻度が高くなっていた．

医学部学生の代替医療に対する意識に関する調査
吉野千寿子ら：Health Sciences　21 巻 1 号 Page88-97
聖マリアンナ医科大学医学部 3 年生を対象に代替医療に関する意識調査を行った．代替医療という言葉の知名度は 65%，利用率は 56%で，利用した代替医療の種類は，サプリメント，ビタミン剤，栄養補助食品が最も多

く 77%, 次いで徒手療法, 漢方薬, アロマテラピー, 鍼灸などであった

妊娠期における栄養機能食品摂取の実態調査

早川舞ら：愛知母性衛生学会誌　23 号 Page59-65

産科クリニック 1 施設で妊婦健診を受診した 100 名(29.4±3.2 歳)へ, アンケート調査を実施. その結果, 25 名の妊婦が栄養機能食品を定期的(1 週間に 1 回以上)に摂取しており, そのうち 12 名が, 「雑誌での紹介を見て」「貧血気味だったため」などの理由で, 妊娠を機に摂取を始めていた. また, 妊娠前はビタミンC, 鉄, カルシウムが多く, 妊娠後はとくに葉酸, 鉄の摂取が多かった

企業における相補代替医療の利用　ある製造業の作業者の調査

沢崎健太ら：産業衛生学雑誌　47 巻 6 号 Page254-258

ある大手住宅建築業の工場の従業員を対象に質問紙調査を実施. 有効回答者は 263 名(回答率 84.3%). 回答者のうち過去 1 年間に CAM を利用した者は 134 名(51.0%)であった. その内訳は栄養ドリンク(35.4%), サプリメント(16.3%), マッサージ・指圧(13.7%), カイロプラクティックまたは整体(8.7%), 健康器具(6.5%), ドラッグストアのハーブや漢方薬(3.4%), アロマテラピー(1.9%), 鍼灸(1.9%), その他(1.5%), ホメオパシー(0.0%)であった.

岐阜薬科大学附属薬局の来局者におけるサプリメント利用の実態調査

足立哲夫ら：医療薬学　31 巻 10 号 Page845-850

同薬局来局者または付き添い者を対象とし, サプリメントの利用状況をアンケート調査. 無作為に抽出した 314 名に依頼し, 同意が得られた 304 名を対象とした. 内訳は男性 126 名, 女性 178 名, 年齢 60.1±14.4 歳, 患者が 244 名, 付き添い者が 60 名であった. サプリメントを利用したことがないという回答は 58.2%に認めた. 利用経験者は女性に多く, 年代別では若い年代ほど多かった. 利用経験者 127 名における利用品目は, ビタミン類が 64 件と最も多く, 摂取目的は健康維持が最も多かった. 若い年代ではダイエット目的が, 高齢者では病気の治療目的が多かった.

薬剤部から　糖尿病患者における健康食品の利用状況

工藤峰子ら：プラクティス　22 巻 5 号 Page596-599

糖尿病患者における健康食品利用の実態を把握する目的で, 外来受診時にアンケート調査. 回答者数は 73 例. 健康食品を現在利用 32 例, 以前に利用 10 例, まったく利用経験のなし 31 例. これまでに利用したことのある健康食品の数では, 1 種類 43%, 2 種類 30%, 3 種類 21%, 4 種類以上 6%. 具体的に利用経験のある健康食品数は 69 品目に上り, 最も多いのは青汁で 13 例, 続いてグァバ茶, 黒酢の 5 例.

葉酸の認知度調査:妊娠中のエネルギー・ビタミン・ミネラル

近藤厚生ら：日本医事新報　4244 号 Page23-27

関東以西に分布する 20 病院において, 妊婦に対し葉酸に関するアンケート調査. 1467 名(回答率 58%)の回答が得られ, これらを分析した結果, 葉酸が神経管閉鎖障害と関連する事実を承知していた割合は 1467 名中 396 名(27%)と低値であった. 葉酸サプリメントを摂取しているのは 20%(298 名).

サプリメントや OTC 薬の使用状況と医薬品との相互作用調査

石井照太郎ら：調剤と情報　11 巻 7 号 Page971-976

外来患者の服用実態を把握するために, 窓口でのアンケート調査を実施. ワルファリンについては, 別途調査を行った. アンケートでは 526 件の回答が得られた. ワルファリン服用患者に対しては, 処方履歴より抽出した 38 人に封書を郵送し, 29 件の回答が得られた. サプリメントまたは OTC 薬服用者は, 233 例で, ワルファリン服用患者では 7 例であった. 摂取している品目数は, 延べ

256 品目(72 種)で,1 人が摂取する品目数は,ほとんどが 1〜2 種類までであった.

健康志向が高い人間ドック受診者における薬草酒に対する関心度のアンケート調査について

新谷俊一ら:岐阜県立下呂温泉病院・健康医療フロンティアセンター年報 31 号 Page75-83

「東西医学ヘルスドック」の 1 泊 2 日ドック受診者に食前酒として提供している薬草酒について紹介し,受診者 74 名(男 57 名,女 10 名,不明 7 名)から得たアンケート回答をまとめた.健康のために心掛けていることは「人間ドック受診」が多かった.民間薬や健康食品を利用しているのは 13.5%,自家製薬草薬は 9.5%で,医療機関受診者で利用を医師に伝えていたのは 13 名中 9 名であった.

慢性維持血液透析患者における健康食品への意識調査と利用状況

森山幸枝ら:日本透析医学会雑誌 38 巻 2 号 Page131-138

慢性維持血液透析患者の健康食品等に関する意識と利用状況を調査.平成 13 年は 108 名,平成 15 年は 116 名を対象に聞き取りアンケートを行った結果,健康食品に対する興味は 2 年間で 39%から 45%に,利用経験のある患者は 24.1%から 42.2%に増加.利用理由は主に便秘解消や健康維持・増進.利用にあたり栄養士またはその他の病院スタッフに相談した患者は 10.2%から 4.3%に減少.

女子学生の食生活と葉酸に関する意識 一般大学生と看護学生の比較

上田惠子ら:母性衛生 45 巻 4 号 Page399-404

女子大学生と女子看護学生の食生活および葉酸に関する意識について比較検討.女子大学 1〜4 年生 112 例(一般大学生)と,看護短期大学に通学する 1〜3 年生の女子学生 179 例を対象.「サプリメント(栄養補助食品)」は約 9 割の大学生,看護学生ともに摂取経験があった.

神奈川県国体女子サッカーチームのサプリメント・薬使用に関する実態とトレーナーサイドからみた問題点について

光岡かおりら:医道の日本 63 巻 11 号 Page151-157

アテネオリンピック日本代表等のトップレベル選手を含み国体で毎年好成績を収めている神奈川県国体女子サッカーチームの選手を対象に,サプリメント・薬等に関するアンケート調査を実施.15 例中,定期的にサプリメントを摂取した経験のある者は 13 例であった.

補完・代替医療の多様性について 補完・代替医療に対する一般外来患者の意識調査

植村英俊:京都府立医科大学雑誌 113 巻 5 号 Page285-294

一般診療所および漢方専門診療所を受診した 20 歳以上の患者を対象に,漢方,鍼,灸,マッサージ,カイロプラクティック,温泉療法,催眠療法,タラソセラピー,気功,ヨガおよび健康食品の利用状況,知った手段およびその効果に関する意識調査を行った.調査票の回収率は 97%(590/609)であった.61%(362/590)の患者が何らかの補完・代替療法を利用しており,このうち,漢方が 72%(261/362)と多く,次いで健康食品が 45%(163/362)であった.

当院周辺における代替医療 利用状況に関する調査報告

外山学:人間の医学 40 巻 1 号 Page56-60

相補代替医療(CAM)の利用状況を調査.CAM として挙げた 15 項目のどれかを,この 1 年間で 1 回以上利用したことのある人は,76.7%.「定期的に利用している」と答えた項目が 1 つ以上ある人は 60%であった.サプリメントとして,挙げられた品名は,ビタミン類,アミノ酸類,にんにく卵黄,ブルーベリー,黒酢など酢の類など.

関節リウマチ患者における民間療法の利用状況

小池達也ら:臨床リウマチ 15 巻 4 号 Page290-294

2002年4〜5月の1ヵ月間に外来受診した関節リウマチ患者153名(女性122,男性31名),平均61.8歳,平均罹病期間11.8年を対象にアンケート調査.補助食品の利用者は60名で,サメ軟骨23名,免疫ミルク16名,キトサン13名,クロレラ8名,しょうがエキス7名,キャッツクロウ5名で,その効果があったと回答したのはサメ散骨7名,免疫ミルク1名,キトサン1名,クロレラ1名であり,他は有効であると回答した者はいなかった.

健康食品の実態調査(第2報)　「第4回21世紀 食と健康フォーラム」アンケート調査より

菅谷量俊ら：日本未病システム学会雑誌(1347-5541)9巻2号 Page230-233

「第4回21世紀食と健康フォーラム」の参加者に対し,健康食品への意識を知るためにアンケート調査を行った.回答者は84名(男36名,女48名)で会社員が約24%,そのうち薬剤師約20%,栄養士約17%であった.健康維持や病気の予防に役立つと思うかについては,大豆ペプチド,牡蠣肉抽出エキス,イチョウ葉エキスの順で役立つとする割合が高く,大豆ペプチド,牡蠣肉抽出エキス,冬虫夏草の順で効果があるとする割合が高かった.参加者が実際に使用している健康食品は,ビタミン及びミネラル類が最も多く,次いでイチョウ葉エキス,整腸製剤,ウコンの順であった

機能性食品(健康食品)についての意識調査

田中淳ら：日本病院薬剤師会雑誌　40巻1号 Page37-39

平成14年2月に内科,外科,整形外科,眼科の入院患者及び外来患者を対象に機能性食品に関するアンケート調査を行った.半数以上の患者に機能性食品の使用経験があり,使用目的は「健康維持」43%,「病気の治療」22%,「病気の予防」21%であった.

消化器病患者における健康食品の摂取状況

神代龍吉ら：肝臓　44巻9号 Page435-442

九州7施設における内科外来と病棟の患者を対象に,漢方薬を含めた健康食品の摂取状況に関するアンケート調査を行った.その結果,母集団における粗回収率は451/9701(4.6%)で,うち肝臓病患者は304名(51.5%)を占めた.現在・過去に健康食品の摂取経験のある者は326名(72.3%)で,1人平均3品目の摂取状況となった.摂取食品は,ビタミン類が42.3%と最も多く,次いでウコン34.7%,アガリクス16.3%,クロレラ13.8%,以下ニンニク,プロポリス,ローヤルゼリーと続いた.

聖マリアンナ大学病院における代替医学(CAM)に関する更年期症状患者の調査

Shirota Takahikoら：日本更年期医学会雑誌 11巻1号 Page13-18

更年期外来受診中の患者(53.3±9.5歳),70名を対象にして,CAMに対する認識をアンケート調査.患者の42.9%が過去にCAMを受けた経験があった.その結果には79.2%の患者が満足していた.その費用に対しては,36%の患者が高価であると感じた.19種類のCAMに対しての認知度(平均56.4±29.5%)は,サプリメントが90.8%と最も高く,ヨガ・瞑想(87.5%),マッサージ(86.8%)の順で,漢方薬(処方),漢方薬(処方薬以外)は57.6%,64.5%で,最も低かったのはホメオパチー(7.7%)であった.

健診受診者のサプリメント摂取の現状と問題点

田内一民ら：総合健診　30巻3号 Page334-338

健診受診者12927名を対象に,サプリメント摂取に関して問診表による調査を行った.サプリメント摂取者の性別,年代別の比率では,男性は11%で年齢とともに増加し,女性は21.2%で各年代に平均した比率を示した.摂取開始年齢の平均は男性43.1歳,女性39.1歳であり,男女とも30,40歳代で摂取を始める人が多かった.摂取動機については,疲労回復・疲れやすいが男性1位,女性2位で,美容・美肌のためが女性1位であった.摂取種類は男女ともビタミンが1位で,全体の41.9%がなんらかのビタミンを摂取していた.

入院患者における健康食品使用実態と薬局およびインターネットにおける健康食品情報提供に関する調査

和田敦ら：医療薬学　29巻2号 Page237-246

入院患者に対する健康食品使用実態調査を行い，健康食品の一般的な入手先と思われる薬局における取り扱いに関して調査を行った．アンケート回答者100名中ち49名が，健康食品を現在飲んでいる又は以前飲んでいた．情報の入手先として 10 例がメーカー，8例がインターネットを利用していた．

健康食品の実態調査(第1報)　「第3回 21世紀 食と健康フォーラム」アンケート調査より

菅谷量俊ら：日本未病システム学会雑誌　8巻2号 Page228-230

消費者の健康食品への意識を知る為にアンケート調査．年齢層は 50 代が最も多く全体の約3割を占め，次いで60歳以上が多く，50歳以上が全体の約60%を占めた．健康食品を利用している割合は50%を超えていた．最も多く利用されていたものはビタミンやミネラルを補給する健康食品であった．

症例・事例研究　網膜症発症患者における糖尿病民間療法の実態調査

伊藤育子ら：眼科ケア　4巻10号 Page973-977

糖尿病網膜症患者 198 名を対象にアンケート調査．民間療法に関心があると答えた患者は132名で，使用経験のある患者は100名であった．男女差はなく，男性で家族のすすめで始めた患者が多くみられた．使用品目は，血糖値低下目的のものが多く，茶類，クロレラ，タマネギ加工食品，ブルーベリーの順で多かった．

当院消化器内科入院患者における健康食品の摂取実態とその問題点

佐藤洋子ら：医薬品相互作用研究　25巻4号 Page103-108

消化器内科病棟において服薬指導を行った患者 174 名を対象に，健康食品の使用実態を調査．その結果，174名中36名で健康食品を使用しており，癌性疾患患者での使用率は 24.8%，非癌性疾患患者では 14.5%，男女別では男性で 22.9%，女性で 17.4%であった．

肝細胞癌患者による代用民間療法の利用とその関連因子

Kanda Kiyoko ら：The Kitakanto Medical Journal　51巻5号 Page307-311

慢性肝疾患患者 500 名に民間療法利用状況に関するアンケート調査を実施し，肝細胞癌患者69名(男46，女23，平均67.3歳)について検討．70%の患者が民間療法の既往があり，主な民間療法としては，ウコン64.6%，メグスリノキ 41.7%，クロレラ 22.9%が挙げられた．利用目的は，健康増進が 33.3%，症状改善の為が 27.1%であった．民間療法開始前に医師に相談した患者は 14.5%．年齢と民間療法実施頻度との間には有意な負の相関が認められた．疾患重症度の認知と，民間療法実施頻度との間にも有意な正の相関が認められた

三重県内の中・高生のサプリメントなどに対する意識などの調査

加藤公ら：骨・関節・靭帯　14巻6号 Page535-540

中・高生 4,013 名に栄養摂取の実態やドーピングに対する意識等のアンケート調査．サプリメントを摂ったことがある者は 74.1%．ドーピングという言葉を知っている者は 73.5%．強くなる薬があれば使いたいと答えた者は 13.5%であった．

慢性関節リウマチにおける代替療法

長岡章平ら：リウマチ科　25巻5号 Page452-456

1999年12月の1ヵ月間，262名のRA患者にアンケートを配布し，224 名の回答を得，アンケート回収率は 85.5%であった．代替療法の頻度は 100 名，44.6%であった．代替療法の内訳ではビタミン剤が 35 名と最も多く，以下，漢方薬17名，接骨院通院9名，鍼灸8名，いわゆる健康食品は64名であり，極めて多岐であった．代替療法実施患者は未実施患者と比較すると，女に多く，現在の治療

に満足している患者が少なく，リウマチ認定医・登録医を知っている患者に多かった

スポーツ競技者への栄養学的サポートに関する研究

佐竹昌之：徳島大学医療技術短期大学部紀要　10巻 Page75-83

国民体育大会参加競技者および指導者を対象に栄養・食事についてアンケート調査を実施．競技者 238 名中朝食を摂らない者が 14.3%存在し，25%がサプリメントを常用していた．

岩手県における患者行動の特徴に関する一調査　民間療法利用の分布から

高橋有里ら：北日本看護学会誌　3巻 1号 Page19-25

県立総合病院外来に通院している患者を対象．222 人の内訳は，性別では男性が約 7 割を占め，年齢は 60 歳代が最も多く平均年齢 64.4 歳であった．民間療法利用者は 70 人(利用率 31.5%)で，男性(同 25.0%)に対し女性(同 45.7%)の方が非利用者に対する利用者の割合が高かった．70 人が延べ 128 件，1 人当り 1.8 件の方法を利用していた．漢方薬・家伝薬・薬草が最も多く，利用者の約 6 割が経験していた．民間療法を利用することを 85.3%が重要だと捉え，78.5%の患者が効果を自覚するなど民間療法に肯定的であった．

西洋オトギリソウ(St. John's Wort)と相互作用する薬剤を処方された外来患者に対する服薬指導と併用実態調査

本間真人ら：薬学雑誌　120巻 12号 Page1435-1440

西洋オトギリソウと相互作用の可能性のある薬剤を処方された 741 名を対象とし，西洋オトギリソウ含有健康食品の摂取に関するアンケート調査を実施．741 名中 453 名からアンケートを回収．服薬指導の対象となった当該薬剤の延べ処方件数はワルファリンが最も多かった．処方箋記載の該当薬剤が 1 種類の患者は 573 名，2 種類が 149 名，3 種類が 19 名であった．調査の結果，西洋オトギリソウをのんだことがあると回答したものは5名．うち3名は摂取している健康食品に西洋オトギリソウが含まれていることを知らず，うち 2 名はアンケート調査を行った時点まで摂取を継続していた．

医薬品と健康食品の相互作用に関する意識調査

三村泰彦ら：医薬ジャーナル　36巻 12号 Page3356-3367

外来及び入院患者 978 名の標記調査回答をまとめた．健康食品の使用経験者は全体の半数を占め，「時々使用」「ほぼ毎日使用」が 3 割であった．使用者の半数は複数の健康食品を併用していた．使用目的は「健康維持」「栄養補給」「病期改善」の順で，次いで男は「滋養強壮」，女は「美容目的」であった．「健康食品使用を医師・薬剤師に話す」は使用経験者の 14%で，診察時や調剤薬局で「健康食品の使用の有無を聞かれる」は僅かであった．

癌患者における健康食品摂取に関するアンケート調査

高橋浩子ら：病院薬学　26巻 1号 Page95-101

今回の調査で癌患者の健康食品の摂取割合の高さ，支払い総額の多さが明らかとなった．

太田西ノ内病院における糖尿病患者の民間療法実態調査

朝倉俊成ら：太田綜合病院学術年報　34号 Page51-54

糖尿病 65 例を対象としてアンケート調査．民間療法経験者は 15 例で民間療法として用いられているものは多岐に亘っていた．民間療法の開始理由は「糖尿病に効くといわれて」や「血糖値を下げるといわれて」，「体によいといわれて」が多く，その情報入手経路は「知人」が最も多かった．

糖尿病患者におけるセルフケア行動としての健康法・民間療法の利用　利用状況・利用目的・治療との併立

森淑江ら：日本糖尿病教育・看護学会誌　3

巻1号 Page5-13
インスリン依存型糖尿病(NIDDM)患者 82 名を対象に,セルフケア行動としての健康法・民間療法の利用について調査.対象者の79.3%が健康法・民間療法を利用していた.健康法・民間療法の利用者の 98.5%は医療者から指導された治療法と併立させていた.

糖尿病患者における民間療法の頻度と内容 実態調査より
平井康子ら:プラクティス 13 巻 5 号 Page469-473
漢方薬から健康食品に至るまで様々な民間療法が出回っている.著者等の調査では糖尿病患者の約 7 割が何らかの民間療法を過去又は現在に実施していた.

高血圧症における民間薬,民間療法について
畑俊一:日本医事新報 3293 号 Page32-34
外来通院中の高血圧症患者に,アンケートにより民間薬や民間療法施行の実態を調査.民間薬や民間療法の体験者は,191 名中 70 名(36.6%)に達し,性別ではやや女性に多い傾向であった.酢,中国茶,クロレラなど,いわゆる健康食品と称されているものが多かった.

以上の調査研究では、調査の規模や対象者といった諸条件が異なっており、各調査間での比較は容易ではない。

(2) 医療従事者を対象にしたサプリメントに関する調査(意識調査および利用調査)

①医師を主な対象

臨床内科医における代替医療の認知度 糖尿病治療の観点から
石田芳彦ら:兵庫県医師会医学雑誌 46 巻 3 号 Page222-227(2004.04)
臨床内科医 75 名を対象に「糖尿病の代替医療に関するアンケート」調査を行った.代替医療関連の名称の認知度に関して「代替医療」,これまで行ったことのある西洋医学以外の治療法や薬の利用に関しては「漢方薬」,市販されている糖代謝に関連する特定保健用食品の認知度に関しては「蕃爽麗茶」,糖尿病の民間療法の認知度に関しては「朝鮮人参」が最も高かった.糖尿病学会専門医と非専門医の間で,差を認めたのは,「代替医療」,「特定保健用食品」,「健人茶論」,「蕃爽麗茶」の認知度であった.糖尿病の代替医療の認知度,利用度は共に低いことが判明した

葉酸は神経管閉鎖障害の発生リスクを低減する 産婦人科医と経産婦の認知度調査
近藤厚生ら:産科と婦人科 71 巻 8 号 Page1081-1087(2004.08)
葉酸の重要性がどれほどの産婦人科医と経産婦に浸透しているか,産婦人科医が生活習慣を指導している状況,経産婦の生活習慣についてアンケート調査.葉酸に関する情報を承知していたのは産婦人科医の 76%と経産婦の 15%であった.90%前後の産婦人科医が禁煙・禁酒と栄養バランスの取れた食事を推奨していたが,サプリメント摂取を推奨しているのは 37%であった.経産婦の84%前後が栄養バランスに留意し,禁煙と禁煙を守る女性は各々93%と 74%であったが,サプリメント摂取者は 9%と少なかった

神経管閉鎖障害に対する葉酸の役割 泌尿器科医と患者群の認識度調査
近藤厚生ら:日本泌尿器科学会雑誌 95 巻 4 号 Page663-668(2004.05)
神経管閉鎖障害に対する葉酸情報の認識度,若い女性患者に対する生活習慣の指導内容と患者の生活習慣についてアンケート調査を行った.対象は泌尿器科医 400 名と患者 500 名(女性の二分脊椎患者と神経管閉鎖障害児を分娩した母親,各 250 名)であり,回答率は医師 56%,患者 52%であった.葉酸の役割や重要性についての認識度は医師 26%,患者 92%であり,医師の 10%が総合ビタミンや葉酸サプリメントを推奨し,患者の 25%がこれらを摂取していた.